

市民平和大使が見た広島・長崎

平和祈念事業の一環として作文を募集したところ、小学生から一般まで127編の作品の応募がありました。その中から2人のかたを市民平和大使に委嘱し、広島と長崎の原爆死没者慰霊式・平和祈念式に参加していただきました。

この2人のかたが、見て感じたことを8月14日の大館市平和祈念・戦没者慰霊式の中で発表しましたので紹介します。

平和の翼に願いをこめて

大館東中学校 三年

大庭 智沙 さん



の時間が止まった。市長の感動的な平和宣言、様々な人たちの平和への誓いが読み上げられる。厳粛なまでの沈黙の中、切り詰められた空気が、じりじりと焼き付く。あの日も、やはり、暑い一日だった。涙がこみあげて、胸が苦しかった。

八月六日、午前五時。ロビーにて老夫婦と出会う。彼らは、被爆者であり「式典に参加するためにヒロシマに戻ってきた」と言った。彼らの体験談の淡々とした語り口と、昨夜からのヒロシマの鎮魂の騒めきが、私をその日に導くようだった。そして、私たちの五日間は始まった。

式典が終わり、資料館へ向かった。「遺品」の一つ一つが、私たちへ訴え続ける。炭化した無言の証言者たちが、溶けて同化している彼らが、空気となってもなお影を引き剥がされて存在を示す彼らが、様々な「あの日」が、そこにあった。死と消滅は、ヒロシマにあり、全ての人々に惜しみなく注いだのだ。対話ノートを読みとくと、様々な違いを越えた人々の平和への深い祈りがあった。ビデオからは、被爆者たちの悲痛な叫びが届く。原爆は、その後が更に恐ろしいのだと。午後から、私たちは折り鶴を持って平和公園を巡礼した。折り鶴の少女の像、彼女を初めて知ってから四年目にしてか

なえられた訪問。感無量だった。夕暮れとともに、膨れあがる鎮魂の想いは、灯籠流しで最高潮に達した。切ないまでに荘厳な儀式であった。私たちの流した灯籠の行き着く先が、平和な世界であればと思った。ヒロシマの訪問は、平和への模索の出発点となった。

ナガサキは、祈りの地である。街は、鎮魂のミサが絶え間なく流れる。平和公園、爆心地公園へ折り鶴を捧げた。朝鮮人犠牲者追悼碑もあった。名もない人が、贖罪のために建てたそうだ。ここにも、加害者と被害者という、どうしようもない戦争の矛盾が見え隠れする。資料館では、いくつものシミュレーションと被爆者の証言で、時間が止められていく。世界は、こんなに恐ろしいものを生み出してもなお、いまだ終わらぬ悲しみを知らずにいるのなら、もっともっと勉強し、理解すべきである。

最後に浦上天主堂、片足鳥居、被爆の大クスの木を見た。物言わぬ彼らの強い非難と祈りの声は、私たちの胸を強く抉った。戦争に加害者も被害者もあり得ない。やってしまえば、皆、責任を取らなければならないのだ。私たちのこれからの生き方が、是認されるように努めたい。

NO MORE WAR!
FOREVER
(ノーモアウォー
フォーエバー)